

八重山諸島共生社会プロジェクト

——自然環境と人間活動が調和した環境創出に向けて：2016年度概要——

藤野 裕弘^{*1}・小栗 和也^{*1}・磯部 二郎^{*2}・河野 裕美^{*3}・
日比 慶久^{*1}

1. 実施概要

2015年度に引き続き、本プロジェクトは沖縄県立博物館・美術館において琉球列島の歴史や文化を学んだ。沖縄県立博物館・美術館での取り組みに関して、本年も2015年度は、博物館のバックヤードの見学を実施することができた。バックヤード見学では、資料の搬入から整理・分類の流れ、収集品の保管・管理等を実際の現場での説明があり、大変有意義な取り組みとなった。また、本年度は新たに対馬丸記念館を実習場所に加え、戦争史跡見学を通じて、戦争の悲惨さならびに生命の大切さについての再認識する良い機会となった。沖縄本島での実習後、引き続き石垣島・西表島で八重山諸島の歴史や自然を体験的に学ぶ内容となっている。具体的な実習スケジュールは表1の通りである。特に、西表島における演習実施にあたっては、東海大学沖縄地域研究センターの支援の基に実施されている。なお、この科目の履修学生は、人間環境学科自然環境課程3年次生13名であった。

表1 2016年度八重山諸島共生社会プロジェクト実習スケジュール

8月31日（水）
8:00 羽田空港第2ターミナル集合
8:40 羽田空港出発 ⇒ 11:15 那覇空港到着
那覇到着後、昼食および荷物をホテルに一時預けて、施設見学の準備
13:00 対馬丸記念館見学
（学芸員による展示施設の説明および見学、ワークシートによる演習）
14:00 沖縄県立博物館美術館見学・演習
（展示施設の見学および県立博物館学芸員の案内によるバックヤード見学・ 沖縄県立博物館・美術館作成のワークシートによる演習）
18:30 ホテルチェックイン
チェックイン後、ワークシート内容の教員によるチェック

受理日2017年11月22日

*1 教養学部人間環境学科 *2 教養学部芸術学科 *3 沖縄地域研究センター

9月1日(木)

8:00 ホテルロビー集合

8:30 施設・史跡見学

旧海軍司令部壕⇒平和祈念公園・資料館⇒ひめゆりの塔・資料館

(それぞれの施設にてワークシート作成)

14:40 那覇空港発 ⇒ 15:40 新石垣空港着

16:00 WWF しらほサンゴ村施設見学

18:00 ホテルチェックイン

9月2日(金)

7:20 ホテルロビー集合

8:00 石垣港出発 ⇒ 8:40 西表島 大原港着

到着後、西表島体験(南風見田の浜(はえみだのはま)にて漂流ゴミ等の見学)

10:00 野生生物保護センター見学・ワークシート作成

11:10 月が浜リゾート開発現場見学

12:30 浦内川流域マングローブ&上流域植生調査(山歩き)

16:00 宇多良炭鉱跡

⇒ 月ヶ浜リゾート開発現場&西表島手仕事センター(ミンサー織・地域産業)見学

16:50 東海大学沖縄地域研究センター(浦内施設) 実習打ち合わせ

18:00 「金城旅館」宿泊 感想と意見交換

9月3日(土)

8:20 白浜港集合

8:25 白浜 ⇒ 網取 東海大学沖縄地域研究センター 網取施設

網取地区での自然体験実習(カヌー・スノーケリング・トレッキング)

17:00 網取 ⇒ 白浜

17:30 「金城旅館」宿泊 感想と意見交換

9月4日(日)

8:20 白浜港集合

8:25 白浜 ⇒ 網取 東海大学沖縄地域研究センター 網取施設

網取地区 自然体験実習(スノーケリング)

17:00 網取 ⇒ 白浜

17:30 「金城旅館」宿泊 感想と意見交換

9月5日(月)

8:00 「金城旅館」⇒ 東海大学沖縄地域研究センター(浦内施設)

9:00 実習のまとめおよび総括

10:30 西表島 上原港出発 ⇒ 石垣島港着

11:00 石垣港で解散

2. 実施成果の発表

本演習に参加し、事前に沖縄本島および八重山諸島について調査した、「八重山の産業・文化・景観・生物」などの内容と実習終了後、各自が設けたテーマに沿って、実習の際の記録を基に調査した内容をまとめたポスターを作成し・公開した。

実習成果であるポスターの公開は2016年11月17日～24日までの間、東海大学湘南校舎10号館Sプラザで行い、参加学生による内容説明も行った。なお、作成された代表的なポスターを次のページ以降に紹介する。

八重山諸島共生社会プロジェクト：自然環境と人間生活の持続的両立を考える！

～悲惨な戦争の爪痕「対馬丸」～

4BHN1110 中山 史隆

第二次世界大戦において、日本国が一番大きな被害を受けたのが沖縄（沖縄戦）と言われている。沖縄戦は1944年3月6日より開始された。アメリカ軍の沖縄戦における目的としてはマリアナに在中する基地との連携かつ日本内地を攻めるための拠点を獲得するため、沖縄本島を攻めていた。日本軍は内地での戦いに備えるため沖縄戦において時間稼ぎのような戦術をたて戦いに望んでいた。時間稼ぎすなわち、持久戦のため多くの人員が収集され応戦していった。沖縄戦は第二次世界大戦において最も激戦化した土地とされており、両軍の攻防が激しくなるにつれ周りの被害も大きく拡大していった。沖縄戦において軍人以上に民間人の被害人数が圧倒的に多いと報告されている。少年らは伝達係として駆り出され、ひめゆりと呼ばれる女子学徒隊も戦場で軍人の身の回りの世話をしており多くの犠牲者が出たと確認されている。



「対馬丸」 <http://www.asahi-net.or.jp/~un3k-mm/hondo-tushima.htm>より引用



対馬丸

沖縄戦の激戦化に伴い、沖縄本島は危険と判断され内地への学童疎開が国から指示が出された。疎開には対馬丸、暁空丸、和浦丸と呼ばれる貨物船が用意され長崎へと向かった。これらの船はアメリカ軍の潜水艦ボーフィン号に追跡されており鹿児島から260km離れた地点でボーフィン号から放たれた2発の魚雷によって対馬丸の船首、船尾に命中し一瞬のうちに傾き沈んでいった。海に投げ込まれた乗客は船から流れ出した木切れや櫓にしがみついてた。しがみついても力尽きたり、飛び交う破片や荒波に飲まれ沈んでしまう者が多くいたという。乗船者1661人に対し、生き残った者は一般疎開者が118人、学童はわずか59人ほどで766人もの子供達が命を落としてしまった。箱口令により対馬丸が撃墜されたことは秘密にされてきた。これらが知れ渡ること疎開を拒む人が増加し円滑な疎開ができなくなるためである。そのため、無事に生還した人々は国から厳重な注意を受け、人々に真実を伝えることができないでいた。これは戦後にまで続き1950年、対馬丸遭難者追悼会が結成され波之上護国寺に慰霊碑である小桜之塔が建てられた。さらに1997年に国へ対馬丸の引き上げを要求するが安全に引き上げるのがむずかしいと判断され、代替として2004年に対馬丸記念館を小桜之塔の近くに建設した。戦争を知らない今の世代や対馬丸事件を知らない人々に戦争の悲惨さや現代の日本との違いについてなどあらゆる観点・視野から戦争と平和、亡くなっていった方の想いを感じ取ってもらう施設となっている。

70年前に起きた第二次世界大戦における対馬丸事件は、ただ『かわいそう』『悲惨』と言った戦争への先入観だけで終わりにしていいものではないといえる。対馬丸記念館には対馬丸に乗船していた人々の遺品や漂流物が展示されている。これらはどれも元々の原型をとどめているものが少なくこれらを見ているだけでどれだけ悲惨だったのかがうかがえる。また、実際に生存した方々の当時のことについての言葉が今の平和を生きる我々の胸を強く締め付ける。これらの感情は誰しも一度は抱いたことのあるものであって、それらを感じとるだけの施設ではない。戦時中に所持していた品々は損傷し消えていくが亡くなったひとたちの『夢』は失われない。亡くなった人々の想いというのは平和だ。平和という強い想いが希望となり戦争によって生じる憎しみを超越し再び起こる戦争の連鎖を止めることにつながる。我々は亡くなった人々が持っていたであろう夢の中に入っている。普段の何気ない会話や今回のような校外での貴重な体験と言った何気ない自然環境の中で生かされている私たちの日常が亡くなった人々たちにとったらこれらは夢にあたることなのかもしれない。亡くなった人々たちの希望を我々が考えた上で二度とこのようなことが起こらないようにまた、世界では今この時にも子供たちの希望が失われているかもしれない。対馬丸記念館を通して戦争の悲惨さだけでなく希望となる平和な未来を考えていくことが今の我々に残された課題ではないかと考えられる。

八重山実習を通して感じたことは、戦争について何もわかっていなかったということが挙げられる。この実習がなければ対馬丸を知ることは難しかったと思われる。今まで戦争というものを学ぶ場はあったがどれも悲惨や辛いと言うもので終わらせていたが対馬丸記念館を訪れてなぜ今これらを考えるのかを考えた時、平和な日常しか知らない私たちにしか感じ取れないものがありそれを後世につなげていき平和とは何か、戦争というものを大まかにではなく、細かい出来事も大切だがそれ以上に人々の想いが最重要事項になってくるところに戦争の爪痕が残されている。これら全てを知ることは難しいことかもしれないが、自分が実習などで訪れた跡地のことに関しては深く知り、その場所がある意義や伝えたいことを考察し、平和というもののついて考えていきたいと考えている。

引用文献：対馬丸記念館パンフレット



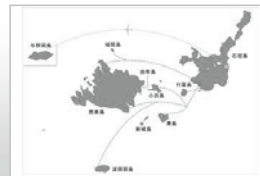
八重山諸島共生社会プロジェクト：自然環境と人間生活の持続的両立を考える！

八重山諸島の歩み～県立博物館をみて～

4BHN1230 今野紗貴

八重山諸島とは

八重山諸島は、石垣島、西表島、竹富島、黒島、小浜島、新城島、与那国島、波照間島その他合計 32 の島々から形成されている。沖縄本島から 400～500Km 離れていて東京と 1 時間の時差がある。沖縄本島よりも台湾の方が近く、与那国島からは約 120Km しかないのである。気温は沖縄本島よりも 1、2 度高い事が多く、歴史、伝統、文化、方言など、独自の文化がある。



石垣島 石垣空港 (<http://www.oki-airport.co.jp/ryukyu.html>)

①琉球王国の繁栄と滅亡

琉球王国とは、今から約 570 年前（1429）に成立し、約 120 年前（1879）までの間、約 450 年間にわたり、日本の南西諸島に存在していた。琉球諸島は、12 世紀頃からいくつかの政治的勢力が現れはじめた。各地に「按司（あじ）」とよばれる豪族が現れ、争いなどを繰り返しやがて統一に繋がった。1429 年尚巴志（しょうはし）が主要な按司を統括し、はじめて統一権力を確立し、尚家を頂点とする琉球王国が始まったのである。琉球では独自の国家的な一体化が進み、中国をはじめ日本、朝鮮、東南アジア諸国との外交・貿易を通して海洋王国に発展した。そんな中、八重山諸島では、各島々に勢力を持つ者がいたが、西表島に大きな勢力を持つ仲宗根豊見親が、責催促に石垣島で勢力を持つオヤケアカハチのもとへ行ったが、オヤケアカハチはこれを 3 年間拒否し続けた。また、オヤケアカハチは宮古島を攻めようとしたため、琉球とオヤケアカハチの争いが起きた。この争いでは、琉球が勝利しオヤケアカハチが敗北した。アカハチの乱の後、八重山は琉球王国の支配下になった。そのため、東南アジア諸国から様々な影響を受け、独自の文化が形成されていった。その中で首里城は海洋王国の政治・経済・文化の中心であった。しかし、やがて日本政府は、1879 年軍隊を派遣し首里城から国王尚泰を放逐し沖縄県の設置を宣言した。そこで琉球王国は滅亡したのである。

沖縄県立博物館

「海と島に生きる－豊かさ、美しさ、平和を求めて－」をメインテーマに、地理的特性や恵まれた自然の中で育まれてきた、風土、歴史、文化を人類史、自然史の中で位置づけ、海と島に生きていくことの普遍的な意味を問う展示を行っている。



②沖縄戦においての西表島

第二次世界大戦で米軍は、重要でないとみと八重山諸島を素通りし、沖縄本島を攻撃した。そのため八重山では艦砲射撃を受けた程度で上陸はなかった。しかし、島にいる日本軍の命令で波照間島の人々は西表島に強制避難（疎開）させられた。その前に台湾に疎開する人もいたが、残った人々の強制避難の場所は、西表島の中のマリアの発生地域であり、ひとつの集落が 1920 年に廃村になった場所であった。西表島に避難した住民の多くが、マリアによって死亡したのである。戦争での犠牲者は、ほとんどがマリアによるものであった。住民は、米軍が上陸した際食料調達できなくするために、避難する前に家畜を全て処分するように日本軍から命じられていた。しかし処分をしないで避難する住民もあり、それらの家畜は日本軍が爆撃などにして島外に送った。そのため、この強制避難は軍が軍のために住民を犠牲にしたと言われているのである。



オヤケアカハチ

石垣市立歴史博物館蔵



戦争マリア犠牲者慰霊碑

石垣市立歴史博物館蔵

八重山諸島の歩み

八重山諸島で生活する人々は、琉球王国からの影響を受けながらも、従来からの自然と共に生きる生活を続けた。琉球王国は海を通じ交易を行っており、島は海を通じて多くの恩恵を受けている。しかしながら、自然環境の中で生かされている我々は、自然から与えられるだけではなく奪われる側でもある。たとえば、沖縄戦の際に波照間島の人々は避難地として西表島に逃げ込んだが、マリアによる被害など過酷な条件も突きつけられた。しかしその地で生きていかなければならず、人々は非常に苦しんだ。我々も自然のなかの一部であるが、その自然に影響を与える存在であると同時に、自然から多くの影響を受け生活を送っている。自然環境と人間活動は昔から密接に絡み合い、影響し合ってきた。これからの自然環境からの恵みを受けるのであれば、同時に搾取もされるということを忘れてはならない。海と島に生きる八重山諸島の人々は、これからも海と島の自然と共に生きていくのである。

<引用文献>

- ・首里城～琉球王国への誘い～ (<http://naha-machima-i.com/wp/?p=1432>)
- ・マッシーのグルメ日記 (http://www.cybergarden.net/gourmet/2009/07/museum_café_granrain.html)
- ・首里城公園 (<http://oki-park.jp/shurijo/about/186>)
- ・西表島の歴史-琉球国府 (http://shimanasanpo.com/churajima01/riomote00/rekishien_02.htm)

八重山諸島共生社会プロジェクト：自然環境と人間生活の持続的両立を考える！

八重山諸島伝統工芸品～想いを形で紡ぐミンサー織～

48HN1133 川口 幸恵

自然豊かな八重山諸島には約3000年の歴史をもつミンサー織があります。これは、自然環境の中にある植物から得られた染料と人々の手織りによって気持ちが込められた織物です。ミンサー織を通じて自然環境と人間生活の持続的両立について考察しました。

ミンサー織とは…

ミンサー織とは、「絹袈帯」に由来するものと言われ、つまり綿で出来た狭い帯という意味です。沖縄の各地で織られており、地方によりその柄に特徴があります。八重山諸島では、最も素朴な五つ玉と四つ玉の縞を組み合わせて「いつの世」の模様として、島の娘たちが「いつの世までも末永く仲睦まじく」と想いをこめて愛しい人に贈った帯だと伝えられており、今では、その「いつ世」の柄を取り入れて色々な布に織られており、ミンサーとして広く親しまれています。

【天然染料と自然環境の関わり】

天然染料は自然環境の中に存在する植物から抽出されます。八重山諸島には多くの植物が存在し、天然染料が豊富です。天然染料は植物を育て、収穫し、時間をかけて煮るなどと、手間がかかります。そのため、現在では染色に用いられるものは化学染料がほとんどです。化学染料は主として石油とし、強いアルカリ性の薬品を使うことから廃液の処理によって環境に負荷をかけます。しかし、ミンサー織で用いる天然染料は植物から作られ、土壌汚染防止にも貢献しています。代々受け継がれてきた天然染料を使った染色はそれぞれ植物の持つ個性より色を引き出してくれます。

黄色系…フクギ・八重山アオキ・ウコン

青系…琉球藍・インド藍・クサギ

茶系…オヒルギ・メヒルギ・コウロ

灰色系…アカメガンショ

その他…蘇木・タラマバナ・ベニノキ

http://www.urin-a.com/wp-content/uploads/2013/02/mincer_svo1-2.jpg


ミンサー織の歴史

伝統的工芸品

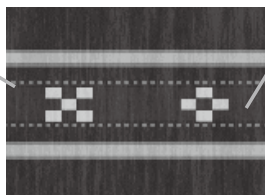
原材料や技術が現在まで継承されて、さらにその持ち味を維持しながら時代の需要に適した製品がつくり出されているものを指します。

ミンサー織の始まりは16世紀初めごろといわれています。アフガニスタンからインド、中国そして八重山地方に伝わったとされています。琉球王府時代には身分により衣服や帯の材質が決められており、木綿は基本的に上流階級のもので、ミンサー帯は士族が身につけていました。ミンサー織の歴史に関する文献が少なく、いつ頃からミンサー帯が織られて定着したかは不明です。ミンサー織は「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づき伝統的工芸品として指定を受けています。

ミンサー織の特徴

約3000年の歴史を持つ代表的な織物で、綿の細い（狭い）帯の意。この「いつよ」の思いを帯だけでなくテーブルセンターやテイスサージ、のれんやタビストリーなど、いろいろな布製品に織り込み、現代的にアレンジすることも試んでいます。

帯の柄に五つと四つの組み合わせが交互に配置されています。これはいつ（五つ）の世（四つ）までも末永くという意味が込められています。


http://imgcdn.ig.tusem.jp/a68/1588558/20140208_974842.pdf

男女の思いを分かりやすく、またシンプルに表している。八重山諸島のむすび柄と合わせて、現代に変わらぬ想いとして「いつまでも共に結ばれている。」と想いを形に込めてつくられている。これらがミンサー織の特徴です。

おわりに

ミンサー織は、八重山諸島において伝統的な技術によって製造され、島の生活の中で育み受け継がれてきた、島のものの歴史を表現している文化であるとも言えます。ミンサー織を製造する人々は、直接的・主体的に八重山諸島の地域文化を伝承していることから、この先も将来に向けて存在させ続けなければいけません。しかしながら、近年は生活様式の変化や外国からの安価な輸入品の増加により、ミンサー織に従事する人が減っており、八重山諸島の素晴らしい文化が薄れつつあります。この伝統文化を残すために、現在、昔ながらの手法を活かしてバックや財布、衣服やインテリアにも使用され、石垣島出身である夏川りみがNHK紅白歌合戦の際、ミンサー柄の衣装を纏って「涙そうそう」を歌うなど、メディアを活用したPRにより島内外の人へ関心も高めました。基本的に、伝統的工芸品は、手作業によって作られるため、人が伝承し続けなければその意味を失ってしまいます。伝統的工芸品の文化を将来に残すことが出来れば、この先も人間の手によって自然環境が守られ、日々の生活に豊かさと潤いを与え、ひいては持続可能な社会の構築に繋がると考えます。今回、八重山諸島共生社会プロジェクトに参加し、ミンサー織の伝統文化をはじめとした学習を通して、改めて自然環境を守ることの大切さとその中に深く人間生活とが関わり合っているということが理解できました。そして、これらが将来にわたり持続的に両立することによって豊かな社会が形成されていくと考えました。

引用・参考文献 「ミンサー織の夢を追い求めて」 沖縄タイムス社

ミンサー工芸館 <http://www.minsah.co.jp/>

八重山諸島共生社会プロジェクト:自然環境と人間生活の持続的両立を考える!

～西表野生生物保護センターの取り組み～

4BHN 1215 斉藤 拓夢



西表島の自然環境と人間生活の両立を考えるにあたって、私たちに何ができるのだろうか。魅力がたくさん詰まったこの島は日本の自慢であり、もっと多くの人にその魅力を知ってもらいたい。しかし現状は、世界的に希少な生物の絶滅が危惧され、交通事故の件数も年々増えている。この現状から得られることは、生物は人間に対して無力という事実である。人を呼び込むための開発や、島内を移動し易いように道路が整備され、車通しも増加した。このことを問題視した西表野生生物保護センターは、人間生活と自然環境、野生生物との両立を考え、センターの活動により当初、島全域に延びるはずだった道路はおよそ半分に留まり、作られた場所は生物が道路に上がらなくても横断できるよう、道路の下に「アンダーパス」と呼ばれるトンネルが作られた。言うならば生物に対するバリアフリーである。センターの活動から考えられることは、私たち人間がこの島の自然環境と生物たちの魅力を守るべきだということである。センターは西表島の現状を知れる場でもあり、人間と自然環境、野生生物が両立するために必要な情報やアドバイスを得られる場でもある。私たちに何ができるのか、島へ訪れた際は是非立ち寄り、考えてもらいたい。私たち人間が生物を想いバリアフリーを創造すること、島の魅力を守ろうという心掛けからの行動が自然環境と人間活動の両立に繋がると私は考える。

参考文献、引用文献、引用写真 : <http://iwcc.a.la9.jp/index.htm> 西表野生生物保護センターHP
 フィールドガイド沖縄の生き物たち
 環境省 レッドデータブック 2014